



いわ さき けい すけ
岩 崎 佳 祐

生 年 月 1991年12月兵庫県生まれ
最終学歴 2014年立命館大学
理工学部建築都市デザイン
学科修了

業務経歴 2014年清水建設(株)入社
同年 関西(旧大阪)支店
2018年東京支店
2024年関西支店

●担当した主なプロジェクト
2014年 奈良済生会中和病院東棟
改築工事
2015年 京都大学(南部)医薬系総合
研究等施設整備事業
2017年 ホテル祇園一琳新築工事
2018年 株式会社文星閣本社工場
建設プロジェクト工事
2019年 品川女子学院C棟新築工事
2020年 品川女子学院B棟
解体・新築工事
2022年 虎ノ門麻布台地区第一種市
街地再開発事業施設建築物
新築工事B-2街区工事
2024年 橿原Ⅲ期増床計画
建設設備工事

■青年技術者のことば

「施主と社会のニーズを紡ぎ、建設業に+αの価値を生む技術者の挑戦と情熱」

施工管理の重要性は、設計図書を基に施主と打合せをしていく中で、施主のニーズを最大限具現化していく事にある。建物をつくり上げる上で、実際に使われる姿を想像し、施主企業の歴史や今後の展望を把握することが必須だ。入社より10年間、病院や学校、ホテル・プールやサウナのある複合施設まで多様な建物の施工に携わり、技術力を伸ばしてきた。現在当社は、デジタルゼネコンとしてデジタル技術を活用した施工管理、生産性向上および働き方の改革を進めている。働き方改革や施工の合理化を図り、建設業の魅力向上に対応しつつ、施主と社会のニーズに応え、今までの建設業に+αの価値を生み出すことが現代の技術者としての在り方であると考えている。今後も経験を積んで技術者として成長しながら、自分の想いを実現していく強い意志を持って挑戦を続けていきたい。

■すいせん者

古里角栄
清水建設(株) 関西支店 工事長

既存躯体活用と施工上の課題解決による工期短縮・コスト削減の取り組み(品川女子学院B棟 解体・新築工事)

■概要と問題点

本プロジェクトは既存建屋の解体と新築工事が一体となった事業で、工期短縮とトータルコストコントロールが求められた。また、施主からは地下体育館と地上教室の面積確保の

要望があった。これらの課題に対して、設計施工の強みを生かし、社内技術部と連携し解決に取り組んだ。

■結果

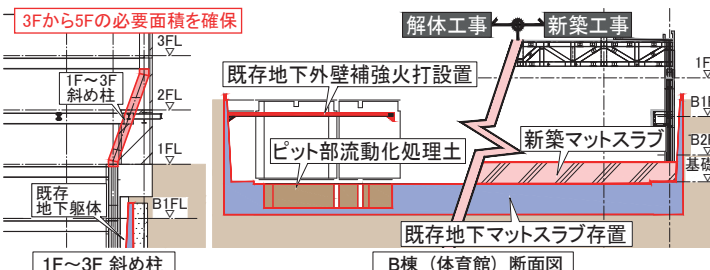
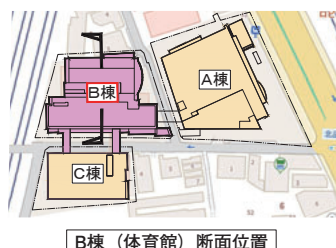
以下の取り組みにより、約4ヶ月の工期短縮とコスト削減を実現するとともに、要求された品質を確保し、無事故で工事を完了することができた。

■既存躯体を存置し活用する施工計画

当初は既存建屋を全て解体する計画だったが、工期短縮とトータルコストの観点から、既存の地下外壁と基礎躯体を残す計画を提案した。施主からの要望に応えるため、既存地下外壁を残しながら、地下体育館の必要面積を確

保する案を設計部と連携して立案した。また、地上教室の面積確保のため、1階を斜め柱とし拡幅する工夫を施した。施工中は既存地下外壁の自立を確保するため、社内技術部と連携し、一部に仮設火打ちを設置して補強

し、施工効率を向上させた。ピット部分については、基礎梁を存置したまま地下2階スラブ面まで解体し、ピット内部に流動化処理土を充填後、その上に新築躯体(マツスラブ)を構築する計画とした。



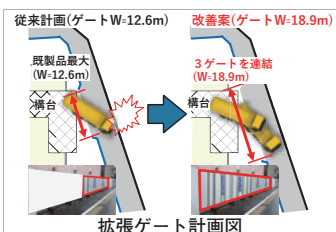
■狭隘な前面道路への対策

敷地4面のうち道路と接しているのが1面のみで、道路幅が3.5m程しかなく、重機や鉄骨などの大型車両搬出には厳しい条件であった。

既製品ゲートでは2分割でも最大通行幅W=12.6mまでしか確保できず、大型車両の搬出入が軌跡上不可能であっ

た。このため、3枚のゲートを連結(W=18.9m)する計画を立てた。課題は中央ゲートに支柱を取り付けられず倒れやすい点だったが、対策としてゲート足元にレールを設置した。また、床面に鉄板とフラットバーを溶接。ゲート側には転倒防止部材を取り付け、控

えなしでも自立する構造とした。これにより、開閉時にゲートが道路側に膨らむことなく操作でき、終業時の転倒防止作業も不要になり、搬出入の効率化と労務短縮にもつながった。



■体育館の長大スパンの鉄骨建方計画

地下体育館は鉄骨トラス構造とし、約24mの長大スパンを実現するため、トラス鉄骨梁を現場のタワークレーンで揚重できるよう、7分割して柱際から順番に建方を行った。

各トラス鉄骨のジョイント部は、剛接完了まで仮設支保工で支持する計画を

立てた。また、トラス鉄骨上部に柱が立つ丘建柱部分については、上部の本締めと溶接が完了し、鉄骨が自立可能になるまで支保工で梁を支持した。支保工解体時にレベルが下がることを予測して、事前に社内技術部で施工時解析を行い、建方時にムクリをつける

とともに、躯体に最適な支保工解体のタイミングを検討して施工した。この事前解析と綿密な計画により、要求された鉄骨精度を確保し、無事故で作業を完了できた。

